

不易と流行の視点で見直す地域の版画教材の開発（2） —現代的学力観による「共同版画」の再開発—

西尾 正寛¹⁾，福田 誠²⁾，清水 悠里³⁾

¹⁾ 畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

²⁾ 北山村立北山小中学校（〒673-1603 和歌山県東牟婁郡北山村大沼569）

³⁾ 那智勝浦町立勝浦小学校（〒649-5334 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町勝浦816）

Consideration of regional learning material from immutable and trend. (2) Redevelopment of learning materials of collaborative printmaking based on a modern academic ability—

Masahiro NISHIO¹⁾， Makoto FUKUDA²⁾， Yuri SHIMIZU³⁾

¹⁾ Department of Education, Faculty of Education, Kio University
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

²⁾ Kitayama Village Kitayama Elementary and Junior High School
(569 Ohnuma, Kitayama-mura, Higashimuro-gun, Wakayama 673-1603, Japan)

³⁾ Nachikatsuura Town Katsuura Elementary School
(816 Katsuura, Nachikatsuura-cho, Higashimuro-gun, Wakayama 649-5334, Japan)

要約 本稿は、和歌山県東牟婁地方美育協会が伝統と捉えている版画教育の特徴と課題を捉え、中心的な教材とする「共同版画」を現在の図画工作科が育成を目指す資質・能力から見直した成果と課題の報告である。同協会の特徴は「生活綴方」を端緒として創立された日本教育版画協会に版画教育を学び、組織的な普及の過程で定着した身近な生活から主題を生み出す教育観であり、その教育観が現在の教育観と乖離していることが課題である。そこで、発想や構想のきっかけや過程を見直した「共同版画」の実践を試みた結果、身近な生活をきっかけにしながらも、児童が表したいことの話し合いを通して主題を創造的に生みだせる教材の開発が必要との成果を得た。

Keywords：共同版画、再開発、地域、発想や構想、創造的

はじめに

本論（1）¹⁾では、和歌山県東牟婁地方における図画工作・美術科教育研究組織である東牟婁地方美育協会（以下、東牟婁美協）が教育研究及び研修に盛んに取り組んでいること、中でも版画教育を地域の特色ある取り組みとして自負していることに注目した。そして、東牟婁地方への導入の歴史的経緯を明らかにするとともに、現在の東牟婁地方の小中学校における版画教育の普及の状況に見られる成果と課題の具体化を試みた。

東牟婁美協は、日本教育版画協会の創立期、1950年代の研究大会に参加し、その教育観や版画の技法、指導技術などを学び、継承できる研究、研修体制を組織し、展開してきた。その一つは、市町村単位で教員を対象として実施してきた版画の技法や指導法の研修会

であり、もう一つが各学校の東牟婁美協の教員が版画の指導の成果をもち寄る「郡学校版画展」である。この二つの取り組みが、現在の全地域的な版画教育の普及に貢献したことは明らかである。

日本教育版画協会の創始者の大田耕士によれば、同協会は戦後の「作文教育運動」と結びつき、子どもの版画は文集の表紙やカットとして普通教育に位置付くことで広い視野をもつことになったという²⁾。「作文教育運動」は一般的には「生活綴方」およびその運動と考えられ、子どもの生活において生きて働く学力を培う方途を、生活をリアルに綴らせることに求めた現実認識教育である³⁾。戦後の「作文教育運動」を端緒とする日本教育版画協会の教育観は、東牟婁美協の現在の版画教育における日常の生活から表現の主題を生み出す指導に反映されている。東牟婁美協には伝統的な版画の教材やその指導方法が認められる一方、現実

認識に基づく版画教育には、現在の図画工作科の学力観との乖離が疑われる。それは、現在の図画工作科が全ての学年の学習活動において、児童が思いを膨らませたり想像の世界を楽しんだりすることが重要である⁽⁴⁾としているからである。

2022年10月実施の造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会和歌山大会の研究分科会において東牟婁美協は研究発表を担当することになった。これを目標に東牟婁美協では、地域の伝統的な教材である「共同版画」⁽⁵⁾を現在の図画工作科が育成を目指す資質・能力から見直し、新たな視点による開発に取り組むこととなった。筆者は「共同版画」の開発の過程で、育成する資質・能力、扱う版画の技法と授業設計、資料収集の支援、実践を経た成果と課題の考察を連携して進めてきた。

本論では、「共同版画」の再開発の経緯と実践を経た成果と課題の検討の結果、地域に根ざした研究会としての東牟婁美協の今後の期待について報告する。

1 「共同版画」の見直しの視点

本論(1)では、東牟婁美協が普及に取り組んできた版画教育には次の二つの特徴があることを明らかにした。

- 東牟婁美協は創立期の日本教育版画協会に、教育観や版画の技法と指導技術を学び、東牟婁地方で全地域的な版画教育の組織的な取り組みにまで発展させてきた。
- 日本教育版画協会の版画教育とともに、「生活綴方」の教育観「子どもの生活において生きて働く学力を培う方途を、生活をリアルに綴らせること」を導入、現在の生活に密着した主題を扱う指導につながっている⁽⁶⁾。

東牟婁美協の版画教育は、現行の小学校学習指導要領解説図画工作科編(以下、小学校学習指導要領)が示す版に表す経験⁽⁷⁾の推奨を実現するものである。また日本教育版画協会の創始者であった大田が児童の豊かな人間性を育成することを目指して推奨した「共同製作」は、小学校学習指導要領の、「A表現」の指導において、児童が友人とともに活動することを楽しむ傾向を生かし、適宜共同してつくりだす活動を取り上げるようにする⁽⁸⁾ことを実現するものである。

一方、東牟婁美協の版画教育の生活に密着した主題を扱う教育観は、1950年代の作文教育の現実認識に基づく教育観を端緒とした日本教育版画協会の教育観に基づいており、現行の図画工作・美術科が目標で示す「造形的な見方・考え方」の「自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだす」⁽⁹⁾教科の本質に沿わ

ないと考えられる。

本研究では、東牟婁美協の2人の小学校教員とともに、現在の図画工作科が必要とする資質・能力の育成を目指し、従来の「共同版画」の目標と内容、指導を見直した新たな「共同版画」の開発を研究の目的として取り組んできた。

見直しの視点は以下の2点である。

- 「共同版画」のおよそのテーマを学校が所在する地域の身近な生活や環境としながら、「絵や立体、工作に表す」活動の指導事項の発想に関する、児童が感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことから表したいことを見付けることや、構想に関する、児童が形や色、材料の特徴、構成の美しさなどの感じなどを考えながら、どのように主題を表すか考えることを身に付けることができるようにする⁽¹⁰⁾。
- そのために、一人一人の児童が思いをもち、見付けた表したいことを共同してまとめたり、形や色、構成を考えたりできるよう、話し合う場と時間を十分にとり、互いのよさや個性などを認め、尊重し合える⁽¹¹⁾よう指導を行う。

発想や構想のきっかけとする、およそのテーマを学校が位置する自分たちの地域の身近な生活とすることは東牟婁美協の伝統的な取り組みに倣う。しかし、過去の多くの作品に見られる、働く人や自分たちの遊び等に拘らず、今の児童が生きる身近な生活から表したいことを見付けることができるようにする。また、話し合う活動を通して、生活や志向が多様化している児童の思いをグループの発想や構想に反映でき、表し方の工夫などを共同してつくりだせる「共同版画」とその指導を計画した。

2 実践について

本研究に当たり、東牟婁美協は、東牟婁郡北山村立北山小中学校(以下、北山小学校)福田誠(以下、福田)、東牟婁郡那智勝浦町立勝浦小学校(以下、勝浦小学校)清水悠里(以下、清水)を実践及び発表者に選抜し、2人が「共同版画」の再開発と両学校での実践及び結果の考察を担うことになった。北山小学校は和歌山県の飛び地の北山村に位置し、低・中・高学年ともに複式学級の小規模校である。福田が指導する5学年及び6学年の児童は7人、清水が2019年に「共同版画」の指導⁽¹²⁾を行った那智勝浦町立色川小学校と同程度の環境である。校区の広さ故に、教員が公用車で児童を地域学習に引率することが認められており、学校と地域が連携して取り組む行事も多い。地域が学校の教育活動を積極的に受け入れる協力関係があり、児

童も地域の産業や環境、地域で働く人々への思いを強くもっている。

一方、勝浦小学校は勝浦漁港を校区にもつ各学年1～2学級、児童数300人余りの学校で、清水が指導する6学年の学級児童数は22名である。色川小学校や北山小学校と比べ、規模がやや大きく、学校や児童と地域との関わりの機会は多くない。

実践では、北山小学校と勝浦小学校の環境や児童数の違いを考慮し「共同版画」の内容や方法を別にした。北山小学校では、学級の児童全員で取り組む従来の方法を踏襲した。また、勝浦小学校では、学級の共同する児童の人数をやや絞り、合わせて版木の大きさ、版画の技法などを新たに作る「共同版画」の開発に取り組むこととした。

(1) 題材の目標

両校で実践の方法が違うが題材の目標は同じとし、指導事項の「A表現」(1) イ、「A表現」(2) イ、「B鑑賞」(1) ア、〔共通事項〕(1) ア、イに即して題材の目標を以下の三観点六項目で統一して取り組んだ¹³⁾。

(1) 知識及び技能

- ・学校がある地域の生活や環境などきっかけに表したいことを見付け、共同で版画に表す自分の感覚や活動を通して、動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさなどを理解する。
- ・表現方法に応じて、彫刻刀や版木、インクなど版画の材料や用具を活用するとともに、前年度までの木版画の材料や用具などについての経験や技能を総合的に活かしたり、表現に適した方法を組み合わせたりするなどして、表したいことに合わせて表し方を工夫して表す。

(2) 思考力、判断力、表現力等

- ・学校がある地域の生活や環境などに感じたことや想像したこと、見たことから表したいことを見付け、形や色、木版画の材料や技法の特徴、構成の美しさなどの感じを考えながら、どのように主題を表すかについて考える。
- ・自分たちの作品の造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方などの変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める。
- ・動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさなどを基に自分のイメージをもつ。

(3) 学びに向かう力、人間性

- ・主体的に地域を主題に共同で版画に表したり、自分たちの作品を鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わり楽しく豊かな生活を創造しようとする。

(2) 教材の概要及び成果と課題

実践Ⅰ 共同版画に表す「私たちの北山村」

I-① 本題材の固有のねらい

北山村のよいところや自慢したいことをきっかけに表したいことを見付け「共同版画」に表す活動を通して地域のよさを改めて実感しながら、今までの木版画の経験で得た技能を生かし、表し方を工夫して表す。

I-② 指導の実際 (6月上旬～9月中旬の10時間)¹⁴⁾ 本題材では次の4点に重点を置いて指導を行った。

- 地域との関係性を意識できる題材名の提示。
- 共同で表したいことを見付け、表現方法を見通すための話し合いの場の設定。
- 児童の彫る活動について安全面に配慮してつくる小グループによる実施。
- 彫りと彫り残しの調整のための薄墨をかけた版木の鑑賞の場の設定。

実践の題材名は、児童が以前にも総合的な学習の時間の調べ学習や個人の版画で取り組み、馴染んでいると考えられる「私たちの北山村」とした。これは、福田が、児童の村探検の経験、筏下り、じゃばら園やじゃばら製品の工場など、地域の産業への思いなどが自分事として発想や構想のきっかけになることを期待して設定した。

表したいことを話し合う場で、福田は、「共同版画」に表す話し合いが一部の児童の考えで進まないよう、身近な生活や学習を学級全員で振り返りながら話し合う場と十分な時間をもった。また、一人一人の発想や構想が反映されるよう、児童が自分の表したいことを提案し合い、話し合いながら、移動黒板に交代で簡単な絵に表し、全体をまとめていくよう促した。



図1 表したいことを話し合い、移動黒板にまとめている

およそ表したいことやその構成が決まった版下絵について、福田は、児童が全員で検討する場をもった。そこでは「表したいことを十分に表せているか」「人の表情を表す工夫をどうするか」など、よりよい表し方を探究的に話し合った。また、彫って白く表す部分と彫り残して黒く表す部分の分け方についても、アイ

デアスケッチを何通りかづくり、全員で検討した。この時点で決め切れないことについては、余地を残しながら計画をすることになった。

彫る活動を始める前、福田は、児童が、事前に前年の自分たちの作品や前学年の作品等を鑑賞する時間を取った。そうすることで、児童が、彫刻刀の種類や彫り方による効果や可能性に気付くこと、表したいことに合わせて彫刻刀を選択したり、彫り方を構想したりすることを期待しての福田の指導である。加えて福田は、彫刻刀の選択や彫り方について、必要に応じて相談し合うことを児童に促した。

また、福田は、彫る活動が安全にできるよう、彫る児童と見守る児童が一組になった2～3名の小グループをつくった。彫る児童に福田は、1人が彫るともう1人が見守り、交代する時、次の児童にそれまで彫ってきた思いを伝えるよう促した。さらに彫り方に不安をもつ児童のために、試し彫りができる版木と場所を用意した。



図2 小グループをつくり、交代で彫りを進める

活動の過程の児童には、彫る部分の形や大きさなどの検討や調整が必要になる。薄墨をかけた版木を使うことによって、彫った部分から木の生地が見え、白色と黒色のバランスが確認できるようになる。福田は彫っている途中の版木を鑑賞する場を設定し、児童が彫る活動の成果を確認し、未決定の部分の形を決めたり、彫る計画を見直したりできるようにした。

I-③ 本題材において児童が資質・能力を働かせた成果について

本題材の成果は次の3点である。

- 話し合いを通して共同で表したいことを見付け、画面の構成を検討する活動を通して、奥行きや動き、バランスなどの造形的な特徴を理解していた。
- 共同して彫る活動の成果を確認する過程で、児童が個々に新たな彫り方の工夫をつくりだした。
- 完成した作品から木版画ならではのよさや美しさを感じ取ることができた。

児童が表したいことを話し合う場面では、筏下り、じゃばらなど地域の特徴的な観光資源や特産物などを取り上げた。一人一人の表したいことを一つの版下絵にまとめるため、筏下りとじゃばらのどちらを主にするか児童が検討した結果、筏下りの筏と操船する船頭さん及び楽しむ乗客、じゃばらをじゃばら園で収穫する人々の2つの場面を組み合わせた創造的な情景を表すことになった。



図3 表したいことがまとまった移動黒板のアイデアスケッチ

版下絵にまとめる過程で表したいことを一層鮮明に表すため、川の岩の形や大きさなどを実感できるように実際に川まで見に行く児童がいた。また、筏下りの乗客の楽しそうな、あるいは、怖そうな様子の表し方についてポーズや表情など演じながら検討する児童もいた。これらの児童の姿には表現方法を探求していることが伺えた。表したい筏下りとじゃばら園の様子を構成し一つの版下絵にまとめる場では、いくつかの造形的な特徴を理解している姿を捉えることができた。例えば、川が遠くから手前に流れているよう川幅と流れの形について検討する児童の姿から動きや奥行きを理解していることが伺えた。また、画面の上方にじゃばらの収穫の様子、下方に川を下る筏と筏師や乗っている観光客の表す大きさや構成を検討する姿からはバランスを理解していることが伺えた。

個々の彫刻刀の使い方に関する技能については、前学年までの経験を生かし、彫る向きや手の動かし方などを工夫しながら彫っていることを捉えることができた。じゃばらの丸い形を彫ることに戸惑った児童が、別の児童が円を描くように彫刻刀を動かす姿を真似て彫っている姿には、共同で作りだす活動を通して技能を更新する状況が見て取れた。

彫り進むに従い、薄墨をかけた版木から、刷り上がりのイメージを捉えられるようになった。そこでは、版下絵の段階では気付かなかった白と黒の色のバランスについて相談し直す姿が見られ、技能と思考を共に働かせていることが伺えた。

彫り始める前の計画で、福田は、児童を小グループ

にし、グループ内の児童を一定の時間で交代させようとしていた。しかし、活動が進むにしたがい、彫りを交代する児童に、自分が彫り始めた部分を彫り切りたいとの思いを伝える児童が現れ、福田は、その姿に児童の「共同版画」に表す活動への主体的な態度を見て取った。そこで福田は彫る活動を時間で交代する指導を見直し、一人一人の児童が彫り始めた部分を彫り切ってから交代することを認めることにした。



図4 学級の全員で共同して刷りを行っている状況

全員でインクを載せ、刷り上げた作品には、児童から「アイデアスケッチよりもよさを感じる」との声が上がった。

児童は、話し合う活動を通して「筏下りもじゃばらも人が受け継いできたものだから、北山村の人を大きくかきたい。人があっての北山村だから」との思いをもちながら表したいことを具体化した。さらに、彫る活動と、彫っている版木の鑑賞の活動を重ねる過程で、決めきれないで彫っていた白くする部分と彫り残して黒くする部分を決めたり、当初から計画していた彫る部分を見直したりしてきた。こうした活動の成果としての作品から、白色と黒色による表現だけでなく、インクの厚みや刷りの圧によってできる版画紙の凹凸などの質感も伝わってくる。様々なよさや美しさが組み合わせられた結果、児童は想像していた以上のよさや美しさを感じたようであった。東牟婁美協の版画の研修では、児童が刷りの手応えを感じることができるよう教師が指導することを共有する。その成果が表れた場面であった。



図5 完成した作品

I-④ 実践の課題

この実践の課題については以下の2点が考えられる。

- 児童の思いの強さ故に過剰になる表現ができ、教師は指導し切れなかった。
- 教師が彫る活動における安全への配慮を優先した結果、児童の主体的な態度を見通せなかった。

じゃばらが実っている様子や収穫したじゃばらが入った籠を表した部分では、一つ一つの果実が小さくなった故に密度が高くなり、画面全体でバランスが取れない部分があった。本論(1)で松下氏が指摘していた「表したい主題の焦点が不明瞭」となる構成である¹⁵⁾。福田は、児童が表したいことの構成の美しさを感じ取り、画面全体のバランスを理解しながら版下絵に表すことを期待し、表すものの大きさや位置などについて児童の思いを聞き、相談や助言などを行っていた。しかし、彫りの過程を経て、バランスが取れていない部分が出てしまった。じゃばらの小さく丸い形を彫ることが難しい児童もいて、彫り方の工夫を経て児童の思いが表れた成果としてこれを肯定的に捉え、尊重したいと考えた。児童の思いを大切にする発想や構想とその構成の美しさを共に実現できる指導は今後に取り組むべき課題である。



図6 じゃばらの実の表現が過剰になった部分

児童が小グループで彫る場面で、一人の児童が、自分が彫り始めたところを最後まで彫り切りたいと黙々と彫る姿からは指導改善の方策を見出すことができた。彫りの活動について、教師は、児童が自分の思いをもって最後まで彫り切りたい部分ができることを前提に一人一人の児童とその部分を相談し、個々の児童が彫る部分を大まかにでも決めておく。それが、彫る活動における児童の主体的な態度を支えることに繋がる指導となると考えられる。

(福田誠 西尾正寛)

実践Ⅱ 勝浦小学校「彫って、刷って、重ねて！～那智勝浦の〇〇～」

Ⅱ-① 本題材の固有のねらい

那智勝浦町のよさをきっかけに表したいことを見付け、彫り進み版画の「共同版画」に表す活動を通して地域のよさを実感しながら、今までの木版画の経験で得た技能を生かし、表し方を工夫して表す。

Ⅱ-② 指導の実際（6月下旬～7月の全10時間）

本題材では次の6点に重点を置いて指導を行った。

- 色の組合せや彫りと刷りの見通しについて思考力、判断力、表現力等が働く幅が広い彫り進み版画の導入と少人数による「共同版画」の計画。
- 一人一人の児童がよさを発揮し共同して活動できるグループづくり。
- 自分たちと身近な地域との関係を幅広く考えることができる題材名の設定。
- 児童が相互に交流し、表現や鑑賞の成果を共有できる教室の環境構成。
- グループで共同して表したいことを見付け、表現方法を考えるための児童による話し合いの場の設定。
- 彫り方の工夫や自分たちの作品のよさや美しさを交流するグループによる振り返りの場とワークシートの活用。

白黒の版画に比較して、彫り進み版画¹⁶は、児童が前学年までに経験してきた技能を活用しながら、色の組合せや彫りと刷りの見通しについて思考力、判断力、表現力等を働かせる幅が広い技法である。彫り進み版画は、勝浦小学校の児童と清水にとって初めての技法であった。そこで、清水は、児童が彫り進み版画の特徴や効果、可能性などを知ることをねらい、葉書サイズの版木で個々に試す活動を設定した。一方で清水は、彫り進み版画の方法と学級の人数を考慮し、3ないし4人のグループによる「共同版画」を計画した。1グループで三色程度を重ねて刷ることを想定し、黒1色の「共同版画」でよく使われる90cm×180cmの版木を8～10人程度で使う場合と児童の活動量がおよそ同じになるよう90cm×60cmの版木での活動を計画した。

22人の児童を6グループに分ける際には、清水の日常の児童理解を基に、一人一人の児童がよさを発揮し自分の思いを反映できると考えられる構成にした。清水の学級には共同する児童の人数が多くなると引込みがちになる児童が複数名いることへの配慮である。

題材名については、学校がある地域の那智勝浦をきっかけとし、発想や構想する内容を児童が幅広く捉えることができるよう「那智勝浦の〇〇」と清水が設

定した。

教室の環境については、グループで話し合いしやすく、彫りや刷りの活動でも共同しやすいよう児童の机を向かい合わせる座席にした。グループの机をコの字型に配置し、彫りや刷りの活動が床でもできるように、グループの間を広くした。彫刻刀、インクなどの材料や用具を教室中央に置き、取りに行く児童が他のグループの活動や作品を見ることが出来る動線を確保した。この方策により、清水は児童全員で相互の作品を鑑賞する場を設定せず、鑑賞の機会は児童に委ねるようになった。

グループで共同して表したいことを見付けることができるよう、初めに「那智勝浦と聞いて思い浮かぶものは？」と問いかけ、学級全体で取り上げた個々のつぶやきや発言を基に、グループごとに表したいことについて話し合う場をもった。そこでは、清水は、児童に地域の写真を見ることや、考えたことを簡単なスケッチに表してみることを促したり、必要に応じて児童の話し合いに加わり対話をつなぐ役割を担ったりなどした。話し合いながら表したいことを版下絵に表すグループには、彫り進む計画や色の組合せについても考えるよう促した。



図7 簡単なスケッチに表しながら表したいことをまとめる

彫り進む場面で清水は、児童が前学年までに身に付けてきた技能を働かせることができるよう、使う彫刻刀の種類、彫る向きや深さなどを考えたり相談したりしながら活動することを伝えた。さらに、必要であれば版木に彫る数や彫る向き等を矢印で記してから彫るよう促した。また、色を選択する児童には、事前に彫り進み版画を試した時に感じたことや気付いたことなどを話し合いながら考えるよう促した。さらに、予備の版木で試し刷りをしてみることを児童に薦めもした。

自分たちの作品のよさや美しさを感じ取れるよう、活動の区切りで振り返りの場を取り、自分の彫りや刷り、友達から学んだこと、他のグループの作品から感じたことなどをワークシートに記述し、互いに読み合

う場をもった。

普段から図工に苦手意識を感じている児童には、ワークシートから読み取れる発想や構想に繋がる気付きや工夫の試みなどを捉え、共感的な言葉をかけるようにした。

Ⅱ-③ 本題材において児童が資質・能力を働かせた成果について

本題材の成果は次の4点である。

- 共同で話し合うことを通して、空想や想像によって作りだされた創造的な発想や構想を生み出した。
- 彫り進み版画を共同で作りだす活動により、前学年までの技能を生かしたり、課題を解決したりしながら工夫して表すことができた。
- 発想や構想、技能の働きと関連して期待する知識を理解した。
- テーマの幅の広さと共同で作りだす彫り進み版画が、主体的な態度の働きにつながった。

「那智勝浦と聞いて思い浮かぶものは？」との問いかけに児童は、那智勝浦町を象徴するマグロや魚の料理、海と観光船、熊野那智大社や那智の滝などについて発言をした。それらをきっかけに、話し合うことを通してグループでの発想や構想が連続的に広がってまとまっていく様子が伺えた。こうした活動の経緯を児童の活動の観察やグループの活動や作品からの読み取りを基に述べる。

・「夜の商店街」



図8 作品「夜の商店街」

活動の当初、図8の作品を表したグループの児童はマグロ漁と魚料理のイメージをもち寄った。それらをきっかけにマグロがいる生け簀、魚料理を提供する屋台、自分たちで命名したアーケードなど、実在しない「夜の商店街」という創造的な発想がまとまった。

色については、児童は始めに黄色、赤色、青色の順に、それぞれ均しい圧力で刷る計画をした。1枚目を

刷った結果では赤色が強くなり、児童は夜の感じを表しにくいと考えた。2枚目の刷りでは、赤色が強くないよう、圧力を弱めた赤色の刷りを試みた結果、児童は、最後の青色が強くと表れることが予想できるようになった。この試みが、刷り上がった時のグループ全員の満足につながったと考えられる。

・「那智の滝の秘密」



図9 作品「那智の滝の秘密」

那智の滝とマグロをきっかけに、滝壺からマグロが生まれ、滝を登って人の食事になるという空想や想像を伴った創造的な発想となった。

滝の色の選択について、グループの児童が互いの思いの違いを伝え合うことができずに感情的に対立する場面があった。それを清水は児童の表現への強い思いの表れと受け止めた。児童の思いを聞き、対立が現実の滝らしく見える水色を選ぶ案と現実にはない幻想的な感じを表せる桃色を選ぶ案の対立になっていると整理し、それぞれの色で刷ってみた結果から判断するよう提案した。清水は、この対立は、彫り進み版画が色を選択できる技法であること、一人一人の児童が表現への強い思いをもてたことから生じたものであり、発想や構想の幅が広がった成果の表れと解釈した。

・「理想の海の底」



図10 作品「理想の海の底」

数種類の海の生き物を組み合わせた表現から那智勝浦の漁港をきっかけにしたことが見て取れるが、それ以外に那智勝浦の特徴を示すものは見当たらない。画面の中心に向かい合っている大きめの4匹の生き物は複数の色の組合せで表されている。加えて、周りの情景は余り目立たない大きさや色の組合せで表され、形や大きさ、色の組合せを深く考えたことが伺える。題名の「理想の」との言葉から、児童が表したいことを話し合う過程で空想や想像を働かせ、自分たちの意味や価値をつくりだすよう創造的に発想や構想をしたことが伺えた。

次に、児童のワークシートの記述から、児童の活動を通して伺えた、技能に関する課題の解決手段を解釈する。(以下、原文ママ)

児童A

本時のめあて	ブリは丸いから丸く見えるように見えるようにほる
振り返り	丸く彫ろうとがんばったけどできなかったで、次はこまかくやじるしをかいて丸くほれるようにがんばりたいです。丸くするには少しずつほってちょっと向きを変えたりすると丸くなるということが分かりました。

児童B

本時のめあて	「弁天島をギザギザするようにほる」
振り返り	どうやってほったらギザギザになるか考えて、手でカクカクしているようにちょっとずつほったらギザギザみたいになりました。ちょっとずつゆっくりほりました。

児童C

本時のめあて	滝の流れを意識してほる。
振り返り	色々な白くしたい所を、深く彫りすぎると、全ての白くしたいところがすごく白くなってしまいました。なので、次彫るときには「この場面の絵は少しあさくしよう」といった、深く彫る所、浅く彫る所を分けて、しわがつかれるように彫りたいです。



図11 共同する活動を通して彫り方を工夫する児童

児童Aの記述からは、記述した時間では思うように彫れなかったが、彫刻刀を小さく動かすことで解決することに気づき、矢印を記して実現しようと考えたことが伺える。児童Bの記述からは、弁天島の険しい形を捉え、彫る手の動きのイメージをもち、実行したことが伺える。児童Cの記述からは、薄墨をかけた版木を彫るうちに白黒のバランスに気づき、彫る深さも工夫することに気付いたことが伺える。いずれの記述からも、表したいことを表すため前学年までの経験を基に、自ら彫り方の工夫をつくりだしていることが伺える。清水は、滝の彫り方を見付けることができずに困っている児童に、同じグループの児童が「こんな彫り方があるんじゃない」と話しかけながら滝の形に沿って彫る動きを指で示している姿を捉えている。彫りと刷りが繰り返される彫り進み版画を共同で作り出す活動では、彫りの課題を刷りの活動中に捉え直したり、友人の彫りを参考に改善したりできる。この技法の特徴は、児童が交流できるよう清水が設定した教室環境とも関連し、児童の技能の働きの更新に寄与したと考えられる。

表現の過程での児童には、表す形や色について話し合う姿が見られた。形では、画面上に表すものの形や大きさ、それらの構成について話し合っていた。色については、表したいことに合わせて選ぶ色の組合せによる感じや画面全体の明るさなどについて話し合う姿が見られた。彫刻刀を使って形をつくり出す児童には自分の思いに合った彫刻刀の動きを検討し工夫して彫る姿が見られた。そこには、本題材で清水が児童に期待した、動きやバランス、色の鮮やかさなど造形的な特徴について理解しながら活動する姿を捉えることができた。



図12 色の成果を確認し、次の彫りや刷りの見直しを検討する

本題材の活動を通し、清水は、児童が互いのよさや個性を尊重し自分たちの表現のよさや美しさを感じ取ったり考えたりし、彫り進む活動の見直しを更新しながら資質・能力を高め合う姿を捉えることができた。寄与したと考えられる理由を二つ挙げる。一つは、地域との関係性を幅広く意識できる題材名を基にしたことにより、児童が共同して話したり話し合ったりしながら発想や構想を広げたり深めたりしたことである。もう一つは、彫り進み版画を導入したことで、その技法の特徴を生かし、活動過程で共同して発想や構想したことを見直したり表し方の工夫をつくりだしたりできたことである。これらの児童が資質・能力を自ら育んでいる姿は、児童が主体的な態度を働かせている姿と受けとめることもできる。

II-④ 本実践の課題

本題材の課題は次の2点である。

- 教師が想定した程に児童の発想や構想は地域に密着したものではなく、教師は児童が働かせる資質・能力を十分に期待できていなかった。
- 技法の研究不足から、状況に応じた指導やその計画が十分ではなかった。

清水は、従来の「共同版画」と同じく学校がある地域を大まかなテーマに選ぶことで、児童が発想や構想のきっかけに那智勝浦の日常的生活や社会、環境などに関わる対象や事象を選ぶことを想定し、それは発想や構想の内容にも連続すると考えていた。述べてきた通り、結果は那智勝浦に関する対象や事象を選びながらも、多くのグループで児童は話し合いを通して空想や想像を働かせ、創造的な発想や構想をして表すという、清水の想定を超えた活動になった。東牟婁美協に版画教育が導入された1950年代末の時期と比べ、生活や環境に変化がある地域の学校では「共同版画」にも創造的な発想や構想を促せるテーマと指導の工夫が必要との結果である。例えば「夢の那智勝浦」「12年後の那智勝浦」などのテーマをきっかけにし、地域のままに発想や構想をするか、空想や想像を働かせた発

想や構想にするかを児童に委ね、創造的な幅をもつよう指導を工夫することが考えられる。

本題材の成果として、空想や想像を働かせ、創造的な発想や構想が生まれたり、前学年までの技能を生かしたり、活動過程で出合う課題を解決しながら工夫して表したりしたことを述べた。これらについて、清水は児童の学習活動の成果としては肯定的に受け止めているが、指導者としては、相当な葛藤を感じている。清水が肯定的に受け止めたことは、幅のある発想や構想ができる題材名と彫り進み版画を共同でつくりだす活動との組合せによって、児童が元々もっていた資質・能力を自ら働かせたことである。清水が葛藤を感じたことは、児童の思いに寄り添いながらも児童の活動を支える自らの指導の方策の少なさに気付いたことである。初めての技法故の研究不足から、状況に応じた指導を十分に想定できていなかったことに起因する課題であり、清水は「那智の滝の秘密」のグループに生じた対立は自らの課題が原因と受け止めている。

共同してつくりだす活動では、一人一人の児童の思いが交錯する。指導する教師は彫り進む方法、色の重なるの効果や可能性など、児童が彫り進み版画に見直しをもって取り組めるよう、教師による一層の教材研究と指導の具体化が必要となる。彫ることと刷ることを繰り返す彫り進み版画では、児童の発想や構想が働く機会も繰り返される。彫る技能については前学年までの経験に支えられ、児童は共同して活動しながら課題を解決できるようになることが分かった。色の選択や刷り方に関して複数の案がある場合は、版画の複数性を活用し、候補の案を試行し判断することが解決法であることが児童の活動から分かった。児童が学ぶ姿から教師も学んだといえる。教師と児童の学び合いは新しい試みの度に起こる。こうした学び合いの蓄積が、児童が体全体を働かせて活動できる指導の改善を図る方策になる。

(清水悠里 西尾正寛)

3 本研究のまとめ

(1) 「共同版画」の新たな試みについて

東牟婁美協では、「地域」を主題とする版画教育と「共同版画」が受け継がれてきた。極小規模校の北山小学校では、現在も学校の学習や児童の生活が日常的に地域と深く関わっており、地域に根ざした「共同版画」の指導により、児童は創造的に発想や構想し、工夫して表すことができた。これは「東牟婁美協」の版画教育が長い年月をかけて培ってきた不易の成果である。一方、中規模でやや都市部の性格も併せもつ勝浦小学校では、学級の児童の実態に応じて共同する人数や版

画の技法など創造的に発想や構想ができるようにする新たな試みが有効となることが分かった。これは「東牟婁美協」の版画教育の教育観を変化する現在の社会に求められる流行の視点から捉え、その更新に導く成果である。

共同でつくりだす活動で、教師は、児童一人一人の発想や構想が共に活動する児童との交流によって一層働くよう指導を行う。北山小学校の児童は現実の情景を組み合わせて、勝浦小学校の児童は地域をきっかけに空想や想像を働かせ、創造的に発想や構想をした。2つの実践の成果に共通することは、本研究で試みた「共同版画」の実践において、地域は、児童の表現の主題に密着したのではなく、児童の発想や構想が働きかけとして寄与したということである。これは、資質・能力を育成する現在の学習指導要領の趣旨に応じる学びの姿であり「共同版画」の再開発が導きだした東牟婁美協の版画教育の不易の意味や価値を現代の教育観という流行の視点で捉え直した形である。

(2) 「共同版画」の再開発を通しての東牟婁美協への期待

東牟婁美協の「共同版画」は、現在約60歳以上の世代が現職教員の頃、へき地の小規模校やクラブ活動等で継続的に取り組まれた。その後は、地域の施設に掲示されている作品やOB役員の口伝などによる伝統への憧れから数度の実践が試みられていた。しかし、平成10年の学習指導要領改訂で実施された図画工作科の授業時間数の削減、当該地域の学校の小規模化や統廃合による学校環境の変化、教員の業務の増加などから、東牟婁美協の会員による「共同版画」の継続的な取り組みは事実上途絶えていた。

版画教育を導入して60年余りを経た東牟婁地方では少子化が進行しているにも関わらず、「郡学校版画展」の出品数は現在も増加傾向にある。これは東牟婁美協の版画教育の充実が故である。東牟婁美協には、三学期になると「郡学校版画展」への出品を意図した版画題材を実施する学校や教師が多い¹⁷⁾。東牟婁美協の役員には、過去に入賞した作品に倣って生活に密着した表現内容を扱う内容主義や作品展での入賞をねらう作品主義に因われる教師も少なからずいるという課題の認識がある。版画の指導には多くの授業時間がかかるだけに、東牟婁地方の教員に、版画教育の改善に消極的な傾向があることに葛藤を感じている役員もいる。戦後に作品展を核に盛んに展開した多くの民間の美術教育運動は学校や教師が置かれる状況や教育観の変化に対応できずに衰退してきた。東牟婁美協も現状の維持と継続だけでは版画教育が衰退する可能性はある。それを避けるためには、版画教育を通して育成で

きる資質・能力の検討と共通理解、資質・能力を育成することを意図した指導の工夫を継続していく必要がある。

2つの題材は、実践が可能になる条件を調整し、過去の作品や指導法に縛られずに取り組んだ意味では新たな出発である。実践後には、勝浦小学校で個人製作を経験している下級生が上級生になれば「共同版画」ができるとの期待を抱いたり、関心をもった現役教員が2023年度の版画展に「共同版画」を出品したりするなどの東牟婁美協会員の反応もあった。

状況により「共同版画」が東牟婁美協のカリキュラムに位置付く可能性がある。しかし、「共同版画」で働く資質・能力は「個人製作」の経験に支えられるだけに、それぞれで育成する資質・能力が働き合うバランスのよい指導計画が必要と考えられる。例えば、6学年で「共同版画」を実施するのであれば中学年から5学年までの「個人製作」を十分に充実させる計画にする。あるいは、中学年で経験を基に5学年で「共同版画」を実施し、その学びの成果を6学年で「個人製作」に還元するなどの計画も考えられる。

東牟婁美協は世代間のつながりが幅広く強く、学びたい人が学び合える関係を維持継続している組織であり、作品展の審査が教員研修になっている伝統がある。多くの教員が取り組んでいる版画教育は、図画工作科教育を改善するプラットフォームになる可能性がある。また、表現のデジタル化が目される今日、東牟婁美協の地域に根ざした版画教育には用具を使い身体全体を働かせ表現することの新たな意味を提示する可能性を感じる。

本研究を通して、東牟婁美育が地域に根ざした教材として培ってきた「共同版画」による学びの不易と流行の両面の意味や価値を解釈することができた。今後は東牟婁美協の版画教育の伝統を受け継ぎながら、現代に求められる教育観と変化する児童や学校の実態に応じた新しい「共同版画」の開発、普及及び継続的な発展を期待したい。

(西尾正寛、福田誠、清水悠里)

謝辞

本研究に当たって、和歌山県東牟婁地方美育協会会長の芝崎勝善様には研究協議への助言、協議のための日程調整、会場提供など多大なるご支援とご指導を頂きました。役員OBの松下稔様、平田勝男様には東牟婁美協の版画教育黎明期の貴重な情報を提供いただきました。前会長の清水雅昭様には、松下稔様、平田勝男様への聞き取りの場の設定を始め、会長当時の版画

教育の情報提供など頂きました。東牟婁美協研究会の折には会員の皆様に本研究に関するご支援とご指導を頂きました。

本研究に関わって頂きました全ての皆様に深く感謝いたします。

¹ 西尾正寛「不易と流行の視点で見直す地域の版画教材 (1) 一東牟婁美協版画教育の歴史と現在」、『畿央大学紀要』、第20巻、第1号、2023

² 同上、pp.76-77

³ 吉本均編：現代授業研究大辞典、明治図書、p.104 参考、1987参考

⁴ 文部科学省：小学校学習指導要領解説図画工作科編、日本文教出版、p11、2018

図画工作科の学習では、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかを、図画工作科の特質に応じて示した造形的な見方・考え方の解説で、様々な対象や事象を心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性を育む重要なものである感性とともに、一層重視するものとして示されている。

⁵ 大田耕土、関野準一郎：造形教育体系 = 版画2木版画。開隆堂出版、p80、1975

大田等の文献では「共同製作」としている活動であるが、本論は、東牟婁美協の版画教材の開発の取り組みなので、地域に根付いている「共同版画」の表現を用いる。

⁶ 註 (1)に同じ、p.77

⁷ 註 (4)に同じ、p.120

⁸ 同上、p.108

⁹ 同上、中学校学習指導要領解説美術科編では「自分としての意味や価値をつくりだすこと」と示され、系統性をもった指導観である。

¹⁰ 同上、p.87 第5学年及び第6学年「A表現」(1) イに示される、指導事項を「共同版画」の見直しの視点でまとめ直している。

¹¹ 同上、p.117 第4章2内容の取り扱いと指導上の配慮事項で示される項目。教師が日頃から一人一人の児童のよさや個性などに気付くようにすることが大切で、それにより児童は、自分のよさや個性が教師から大切にされていると実感し、友人のよさや個性も大切にできるようになることなど、多様性を重んじる教育に向かう意図を感じさせる平成29年告示版で新たに示された事項である。

¹² 註 (2)に同じ、p.74

¹³ 国立教育政策研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 図画工作』、

東洋館出版、pp.44-50、pp.93-94に従い作成。

¹⁴ 地域に関わる話し合いは総合的な学習の時間として表現の活動は図画工作科の授業としては約10時間として運用した。児童の活動の進め方に応じたので、夏期休暇を挟むことになった。

¹⁵ 註 (1)に同じ、pp.74-75

¹⁶ 日本児童美術研究会『図画工作 教師用指導書 材料・用具編』、p.158、2020に「彫り進み版画は、1枚の版木を彫っては異なる色で塗り重ねる工程を繰り返して製作する。2刷目からは彫ったところに色が付かないため、前に刷った色が残るなど、児童がこれまで取り組んできた版画とは違う味わいがある。理解に時間がかかる場合があるが、それぞれの色の重なりが美しく、重ねて刷ることで、思いもよらない効果がでることが魅力である」と示されているように、彫る、刷る過程が比較的明確に分かれている一色刷りの版画に比べ、活動の過程で彫りや刷りの成果を確認し、発想や構想し直したり、新たに発想や構想したりする幅がある版画技法で、現行の図画工作科の教科書では5・6学年で扱われている。

¹⁷ 東牟婁地方美育協会『記念誌 美協70年』、p28、2017に、「海と船の絵画展審査会」(出品数473点)「郡学校美術展」(出品数811点)「郡学校版画展」(出品数846点)の記録がある。東牟婁美協の2023年度会長 芝崎勝善氏によれば、現在もその傾向は変わっていないとのことである。